# ケストナーと２０世紀初頭のドレスデン

## 「僕が子供だったころ」Als ich ein kleiner Junge war

2015年８月　朝日カルチャーセンター立川公開講座　岡部由紀子

ドイツ東部の古都、ドレスデンで生まれたエーリッヒ・ケストナーは、20才で故郷を後にする。
両親は没するまでドレスデンを離れなかったが、ナチ政権に活動を制限されたケストナーは、両親を訪ねることも難しく、終戦後も西ドイツ在住のケストナーは、東ドイツとなったドレスデンになかなか足を踏み入れることができなかった。

**この著作の機が熟すまで**

| | |
|---|---|
| 1946年 （47才） | 終戦後、やっとドレスデンを訪ねる機会を得て両親と再会 |
| 1951年 （52才） | 母イーダが死去、80才。 |
| 1954年 （55才） | 父エミールがミュンヒェンのエーリッヒ・ケストナーの家に滞在<br>サン・モリッツにて『僕が子供だったころ』の制作メモを書き始める。 |
| 1955～1957年 | 往復書簡で父親を質問攻めにしながら、執筆を進める。 |
| 1957年 （58才） | 10 月、『僕が子供だったころ』が出版される。 |
| 1957年　大晦日 | 父エミールがドレスデンで死去、90才 |

**ー自伝か、創作作品かー**

＊記憶（Gedächtnis）と思い出（Erinnerung)の違いをケストナーはこう書いている。
「ケーニヒスブリュック通りの48番地、私の幼年時代の2番目の家。もう老境に達したといえる私だが、今、ミュンヒェンで目を閉じれば、足元にはあのアパートの階段の感触、ズボンの尻には腰掛けていた階段の縁の感触が蘇る。 … 記憶と思い出は神秘的な力だ。両者のうち、思い出の方がより神秘的で謎めいている。 … 私達の頭の中には、学んだすべてのことを入れておく記憶の引き出しがある。 … 一方、思い出は引き出しには入っていないし、頭の中にもいない。それは私達の体の中に宿っているのだ。まどろんでいるが、彼らは生きて呼吸をしていて、ときどき目を開く。… 思い出は、手のひらに、足の裏に、鼻の中に、心臓に、ズボンの尻に宿っている。以前経験したことが、何年、何十年経って、突然戻ってきて、私達を見つめるのだ。」（第5章 「ケーニヒスブリュック通り」 和訳：Okabe）

＊事実をふまえた上で、脚色され、部分的に修正を加えられた過去の記録である。
ベルリン空襲で、母の手紙をはじめとした手がかりとなる資料は焼失、父などの情報を参考に記憶を再構成
叔父の家にあったアウグスティン家の年代記、父が贈ったドレスデン関係の書籍などを参照
執筆中、父に当時の状況を事細かく尋ねているが、父からの返事は意図的に処分されたらしい。

＊事実より、自分の感覚で捉えた真実に重きがおかれている。
視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚にかかわる思い出が多く登場
食べ物の描写がとても多い。
→ たとえ事実との齟齬はあったとしても、迫力のある情景描写を優先した。
48番地のアパートの階段は御影石でできていなかった
ヘヒト通りは陰気で狭いとはいえない

＊簡潔なドイツ語で、語りかけるように描かれている
　人々が感じていることを敏感に捉えて、(諷刺をこめて)平易な言葉で代弁することによって人気を得た作家

＊素材は、自分自身と自分と関わりを持った人々
　児童向け著作に登場する、自分をモデルにした子供との類似点と相違点
　父や母は、どう描かれたか？　影の薄い父　支配的な母
　反響の中に、描かれた人からの抗議もあった。（レーマン先生　小学校5年からの担任）

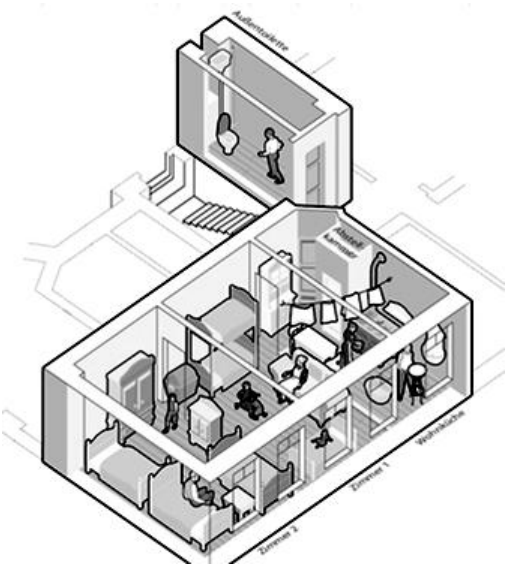
## ーケストナー家は貧しかったかー

**子供の教育のために、両親はそれぞれのやり方で、必死に稼いだ。.**

両親：結婚後 3 年間、デーベルンの一等地に皮細工店を営む
　職人気質の父は、質のよい製品ばかりを作り、負債を抱える。
　→　店を畳み、ドレスデンへ　(手工業の親方から工場労働者へ)

父親：昼間は工場の熟練工　トランク工場　→　軍需工場(兵器庫)
　夕食後は自宅で皮製品の修理や製作の内職
　作業場は台所　→　地下室(晩年まで父のお気に入りの居場所)

母親：コルセットの縫製　→　ミシンの音で赤ん坊が目を覚ますのでやめる。
　3部屋の自宅のうち2部屋を賃貸
　→下宿人の教師が、ケストナー少年に大きな影響を与える。
　　読書の機会、教師という職業への憧れ
　美容師の資格をとり、自宅の寝室で美容室を営業
　髪結いの出張には、しばしばケストナーもついていった。




1900 年ごろの労働者住宅の間取り
トイレは共用、台所、居間、寝室の
3部屋から成る狭い間取りだった

**庶民的ではあったが、貧困層には属していなかった一家**

中古のピアノを 800 マルクで購入　←　教師になるためにはピアノは必修

ケストナー少年は、馬の取引で財をなした伯父夫婦を手伝って、銀行へその日の儲けを預けにいった。
　4万マルク以上預かる日もあった。 その都度 50 ～100 マルクの小遣いをもらった。

1920 年のケストナー家の経済状態
　貯金は、5,000 マルク　年収は、6,000 マルク

ある朝のケストナー少年の買い物
　灯油を 1 リットル半
　2 キロのパン、ジャガイモ 3 キロ
　ソーセージを 125 グラム
　バターをひと塊

| 第一次世界大戦少し前の物価（1 マルク ≒ 5 ユーロ） | | |
|---|---|---|
| 2 キロのパン | 0.44 マルク | ≒ 2.2 ユーロ |
| ジャガイモ 3 キロ | 0.2 マルク | ≒ 1 ユーロ |
| 牛肉 600g | 1 マルク | ≒ 5 ユーロ |
| ビール 1 リットル | 0.24 マルク | ≒ 1.20 ユーロ |
| 厚生食堂のランチ | 0.50 マルク | ≒ 2.50 ユーロ |
| 1910 年の平均年収 | 1,078 マルク | ≒ 5,390 ユーロ |

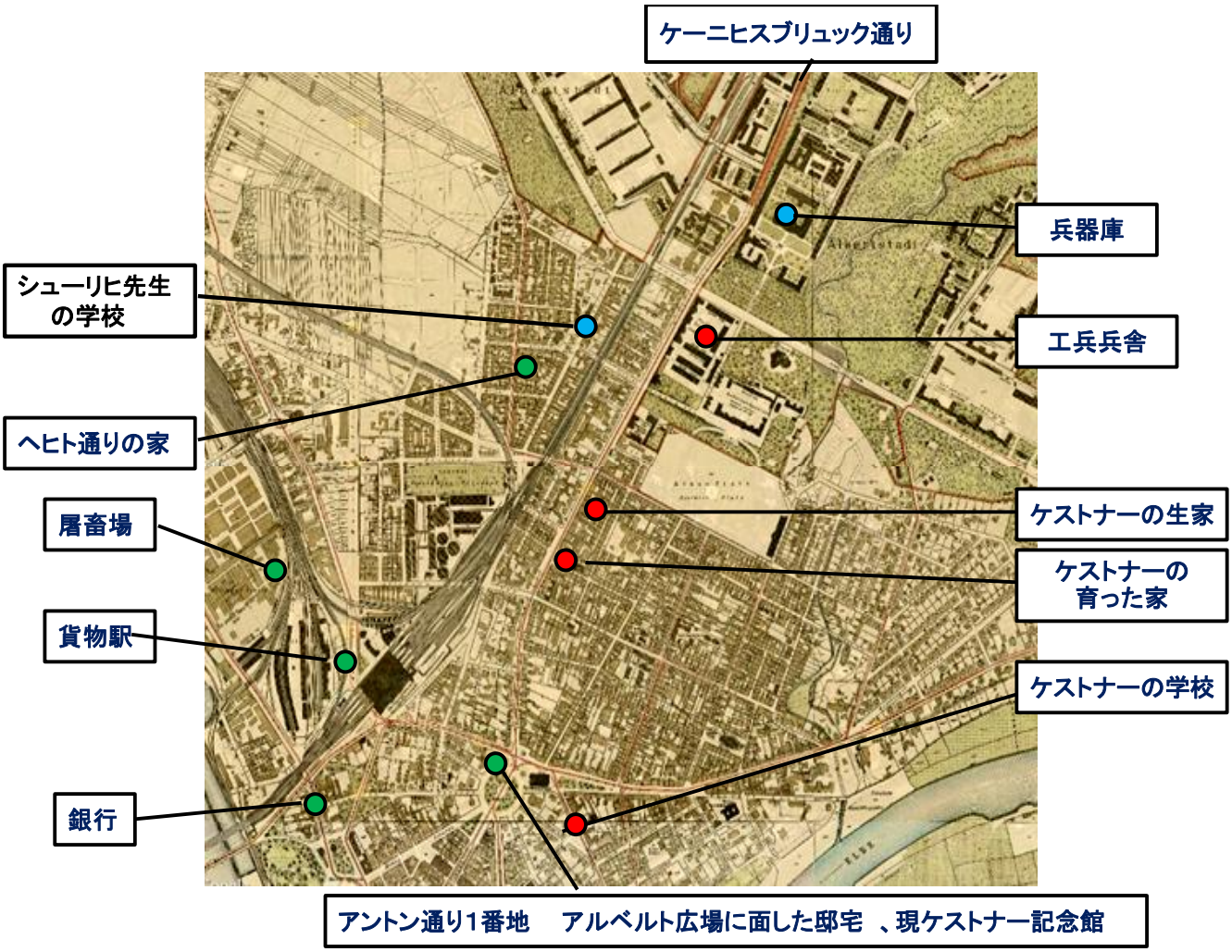
## ケストナー家の年譜　『僕が子供だったころ』関連

| | 年令 | エーリッヒ・ケストナー | | エミール・ケストナー(E)　イーダ・ケストナー(I) |
|---|---|---|---|---|
| | | | 1892 | 結婚　デーベルンに皮細工店を構える |
| 1899 | 0 | ケーニヒスブリュック通り 66 番地で誕生<br>三王教会で洗礼　乳母車で日本宮殿の庭へ | 1895<br>1900 | ドレスデンのトランク工場へ(E)<br>コルセット作りの内職(I)<br>ｹｰﾆﾋｽﾌﾞﾘｭｯｸ通り 48 番地に引っ越す |
| 1902 | 3 | 足の手術 | 1902 | 内職をやめ間借り人を置く（フランケ先生） |
| 1905 | 6 | 体操クラブに入る | | ｹｰﾆﾋｽﾌﾞﾘｭｯｸ通りで労働者のデモ(E) |
| 1906<br>〜<br>1908 | 7<br>8<br>9 | 市立第４小学校に入学　教師になる希望<br>読書、体操、買い物や料理などの手伝い<br>近所の子ども達との遊び場<br>　裏庭、ヘラー草原、プール、屠畜場<br>母と劇場通い　父は留守番<br>美容室、出張美容の手伝い<br>母と徒歩旅行、のちにサイクリング | 1906<br>〜<br>1908 | シューリッヒ先生が下宿人となる<br>夜、地下室で皮製品の修理の内職(E)<br>美容師の修行(I)　自宅の寝室で開業(I)<br>中古のピアノを 800 マルクで購入<br>出張美容で体調を崩す(I)<br>療養を兼ねて徒歩旅行を始める(I)<br>　かかりつけ医ツィマーマンの薦め<br>自転車を買う(I)　　留守番と掃除(E) |
| 1909 | 10 | 秋、シューリッヒ先生の故郷へ旅行<br>（旅先で母への初めての手紙を書く）<br>伯父フランツの妻リーナの手伝いを始める | | |
| 1910 | 11 | アルベルト広場の伯父の家で放課後を過ごす<br>夕食後、家族で伯父フランツの家へ行く | 1910 | 兄フランツがアルベルト広場に引っ越す(I)<br>ｹｰﾆﾋｽﾌﾞﾘｭｯｸ通り 38 番地に引っ越す |
| 1913 | 14 | 三賢王教会で堅信礼を受ける<br>フレッチャー教員養成所に入学（全寮制） | | |
| 1914 | 15 | 母、従姉妹のドーラとバルト海へ避暑旅行<br>第一次世界大戦が始まり、慌てて帰宅 | | 近くの軍需工場に勤める(E)<br>シューリッヒ先生入隊 |
| 1916 | 17 | 実習生として国民学校の教壇に立つ<br>教員に向いていないことを自覚 | 1916 | ｹｰﾆﾋｽﾌﾞﾘｭｯｸ通り兵器庫の火事<br>　煤だらけで帰宅(E) |
| 1917 | 18 | 徴兵される　ｹｰﾆﾋｽﾌﾞﾘｭｯｸ通りの工兵兵舎<br>士官候補生の訓練で心臓を痛め、除隊 | | |
| 1918 | 19 | 再入隊、ケルン郊外の射撃練習場に配属<br>大学進学の希望を抱く<br>敗戦後、教員養成所からギムナジウムへ転校 | | 息子の大学進学を認める |
| 1919 | 20 | 奨学金をもらいライプツィッヒ大学へ | | |
| 1929 | 30 | 児童文学を書き始める『エミールと探偵たち』 | | 息子との往復書簡(I) |
| 1946 | 47 | 終戦後始めてドレスデンを訪れる | 1946 | 息子との再会　衰えが目立つ(I) |
| 1954 | 55 | 自伝的作品の構想　父との往復書簡 | 1951 | 療養の末、他界(I)　息子との往復書簡(E) |
| 1957 | 58 | 『僕が子供だったころ』出版 | 1956<br>1957 | ミュンヒェンの息子の家に滞在(E)<br>大晦日に他界(E) |

## ＜参考文献とサイト・1911 年の地図＞


「エーリヒ・ケストナー　謎を秘めた啓蒙家の生涯 」　　白水社　2010/10/29
スヴェン・ハヌシェク（著）　藤川 芳朗（訳）
Sven Hanuschek: »Keiner blickt dir hinter das Gesicht«　dtv, München 1999

「ケストナー・ナチスに抵抗し続けた作家」　偕成社　1999/12
クラウス・コルドン（著）　那須田 淳、木本 栄（訳）
Klaus Kordon: »Die Zeit ist kaputt – Erich Kästner«　Beltz und Gelberg, Weinheim 1998

Franz Josef Görtz, Hans Sarkowicz: Erich Kästner – Eine Biographie. Piper, München/Zürich 2003
フランツ・ヨーゼフ・ゲルツ ＆ ハンス・サルコヴィッツ（原著） 邦訳なし

Dresden & Sachsen　http://www.dresden-und-sachsen.de/index.htm
ザクセンとドレスデンの歴史と各地区の詳しい情報 （ドイツ語サイト）
Bilder vom alten Dresden　http://www.altesdresden.de/
ドレスデン市街の20世紀初頭の地図と絵はがき （ドイツ語サイト）
Verschwundene Bauwerke　http://verschwundene-bauwerke.de/
第二次世界大戦の爆撃で、ドレスデンから消えてしまった建築物と、現在の情景 （ドイツ語サイト）